

慈悲心鳥

岡本綺堂

青空文庫

人びとの話が代るがわるにここまで進んで来た時に、玄関の書生が「速達でございます。」といつてかさ高の郵便を青蛙堂主人のところへ持って来た。主人はすぐに開封すると、それは罫紙に細かく書いた原稿のようなものに、短い手紙が添えてあるらしかった。主人はまずその手紙だけを読んでしまつて、一座のわれわれの方へ再び向き直つた。

「ちよつと皆さんに申上げたいことがございます。わたくしの友人のTという男——みなさんも御承知でございませう、先度の^{せんど}の

怪談会のときに「木曾の旅人」の話をお聴きに入れた男です。――あの男が二、三日前に参りましたから、実は今夜の「探偵趣味の会」のことを洩らしますと、それは面白い、自分もぜひ出席するといつて帰りました。それが今夜はまだ見えないので、どうしたのかと思つていますと、唯今この速達便をよこしまして、のつび退引きならない用向きが起つて、今夜は残念ながら出席することが出来ない。就いては、自分が今夜お話ししようと思つている事を原稿に書いて送るから、皆さんの前で読み上げてくれというのでございます。一体どんなことが書いてあるのか判りませんが、折角こうして送つて来たのですから、その熱心に免じて、わたくしがこれから読み上げることに致します。御迷惑でも暫くお聴きく

ださい。」

一座のうちには拍手する者もあつた。

「では、読みます。」と、言いながら主人はその原稿の二、三行に眼を通した。「ははあ、自叙体に書いてある。このうち私というのはT自身のこと、その友人の森君という人との交渉を書いたものらしく思われます。まあ、読んでいったら判りましょう。」

主人は原稿をひろげて読みはじめた。

「この降りに、出かけるのかい。」

わたしは庭の八つ手の大きい葉を青黒く染めている六月の雨の色をながめながら、森君の方を見かえった。森君の机のそばには

小さい旅行カバンが置かれてあつた。

「なに、ちつとぐらい降つても構わない。思い立つたら、いつでも出かけるよ。」と、森君は巻煙草をくゆらしながら笑っていた。

森君の旅行好きは私たちの友達仲間でも有名であつた。暇さえあれば二日でも三日でも、時によればふた月でも三月でも、それからそれへと飛んであるく。したがつて、ちつとぐらいの雨や風を念頭に置いていないのも当然であつた。

「これからすぐに出掛けるのか。そうして今度はどっちの方角だ。」と、わたしも笑いながら訊いた。

「久しぶりで猪苗代いなわしろから会津あいづの方へ行つてみようと思つている。途中で宇都宮の友達をたずねて、それから……。」

「日光へでも廻るか。」

「日光……。」と、森君は急に顔をくもらせた。「いや、日光はもう十年以上も行つたことがない。あるいは一生行かないかも知れない。」

「ひどく見限つたね。日光はそれほど悪いところじゃあるまいと思うが……。」

「無論、日光の土地が悪いというわけじゃ決してない。僕も紅葉もみじの时节になると、また行つてみたいような気になることもあるが、やはりどうも足が向かない。なんだか暗いような気分きぶんに誘い出されてね。」

「なぜだ。日光で何か忌いやなことでもあつたのか。」と、わたしは

一種の好奇心にそそのかされて訊いた。

「むむ。」と、森君は今ついたばかりの電燈の弱い光りを仰ぎながら溜息ためいきをついた。

「日光で一体どうしたんだ。」

「実はね。」と、言いかけて、森君は急に気がついたように懐中時計を出して見た。「や、こりやいけない。もう三十分しかない。上野まで大急ぎだ。」

「いいじゃないか、ひと汽車ぐらいおくれたって……。別に急ぎの旅でもあるまい。」

森君は焦じれたそうに衝つと起ちあがって、本箱のなかを引つ掻きまわしていたが、やがて一冊の古い日記を持出して、投げ出す

ように私のまえに置いた。

「この日記の八月のところを見てくれたまえ。そうすれば大抵わかるよ。僕は急ぐから失敬する。」

客のわたしを置き去りにして、気の短い森君はカバンを引つ提げて、すたすたと玄関の方へ出て行つてしまった。森君は三十幾^い歳の今年まで独身で、老婢^{ばあや}ひとりと書生一人の気楽な生活である。雑誌などへ時どき寄稿するぐらいで、別に定まった職業はない。多年懇意にしている私は、今夜もただ簡単に会^え釈^{しゃく}しただけで彼を見送ろうともしなかつた。老婢や書生が玄関でなにか言っているのをよそに聞きながら、わたしはその日記帳を手に取つて、八月のところを探してみようとしたが、電燈の光線の工合が悪いの

で、わたしは初めて起ちあがつて森君の机の前に坐り直した。あたかもその時に、縁側から内をのぞいている書生の顔が障子の硝子^{らす}越しに黒く見えたので、わたしは笑いながら声をかけた。

「先生はもう行きましたか。」

「はあ。」

「僕はもう少しお邪魔をしていますよ。」

「どうぞごゆっくり。」と、書生の顔はすぐに消えてしまった。

わたしは書生のいう通り、ゆっくりとそこに坐り込んで森君の古い日記帳と向い合った。日記の表紙には今から十二、三年前の明治××年と記^{しる}されてあった。わたしは急いでその八月のページを繰^くって見た。月はじめの三日ばかりの間には別に変わった記事を

見つけ出されなかつたが、とにかく森君は七月の末から日光の町に滞在して、ある小さい宿屋の裏二階の四畳半に泊っていたということだけは判った。その当時の森君は或る私立大学の文科の学生であつたことをわたしは知っていた。わたしは日光の古い町にさまよつていた若い学生のおもかげを頭に描きながら、その日記をだんだん読みつづけてゆくと、八月四日の条に、こういう記事を見つけた。

四日、晴。午前七時起床。散歩。例に依りて挽地物屋ひきじものやの六兵衛老人の店先に立つ。早起きの老人はいつもながら仕事に忙がしなりう也。お冬さんは店の前を掃いている。籠の小鳥が騒そうぞう々しいほ

どさえずる。お冬さんの顔色ひどく悪し、なんだか可哀そう也——。

六兵衛老人のことも、お冬という女のことも、前にはちつとも書いてないので、わたしも一時は判断に苦しんだが、その後の記事を読んでゆくうちに、お冬さんというのは老人のひとり娘で、ちよつと目をひく若い女であることが想像された。森君は毎日この店へ遊びに行つて、親子と懇意になつていたらしい。

五日、晴。涼し。——お冬さんは別に身体が悪いのでもないよ
う也。ほかに何か苦勞があるらしく思われる。予の隣りの大きい旅

館に滞在せる二十六、七の青年紳士も、朝夕にたびたびこの店に立寄つて、お冬さんに親しく冗談などいう。お冬さんの顔色の悪きは、あるいは彼になにかの關係があるのではないかとも疑わ
る。——午後六時ごろ再び散歩。六兵衛老人の店先に腰をかけて
いると、かの青年紳士は小せんという町の芸妓を連れて威張つて
通る。お冬さんの眼の色いよいよ^{けわ}嶮しくなる。これにて一切の秘
密判明。紳士は磯貝満彦といいて、東京の某実業家の息子なる由^{よし}。

森君がこうしてお冬という娘のことを気にかけているのを見ると、その日記にいわゆる「なんだか可哀そう」という程度を通り

越しているらしい。森君もおそらく眼を嶮しくして、彼女と青年紳士との行動に注意していたのであろう。しかし六日と七日の日記の上にはお冬さんに関する記事はなんにも見えない。もつともこの二日間は毎日おそろしい雷雨がつづいたので、森君もさすがに外出しなかつたのであつた。

八日、晴、驟^{しゅう}雨。午前七時起床。けさはぬぐうがごとき快晴なり。食後散歩。挽地物屋の店にお冬さんの姿みえず、老人もめずらしく仕事を休みて店先にぼんやり坐っている。例のごとく挨拶したれど、老人なんの返事もせず。——午^{ひる}飯^{めし}の時に宿の女中の話によれば、お冬さんはきのうの夕方に雷雨を冒^{おか}して出^いでたる

まま帰らずとのこと也。情夫おとこでもあるのかと訊けば、お冬さんは
 町でも評判のおとなしい娘にて、浮いた噂などかつて聞いたこと
 もないという。彼女が無断にて家出の子細は誰にもわからず。な
 んだか夢のようなり。——夕より俄かにくもりて、驟雨、雷鳴。
 お冬さんは今頃どうしているにや。夜に入つて雨やみたれば、八
 時ごろ散歩。挽地物屋ひきじものやの店にはやはりお冬さんは見えず。老人が
 団扇うちわづかいの唯さびしげなり。

九日、晴。虫が知らしたるか、けさは早く醒めると、雨戸をあ
 けに來た女中から思いもつかない話をきく。お冬さんはゆうべの
 十一時過ぎに、ちらし髪ちらしの素足でどこからか帰つて來たるよしに

て、お山の天狗にさらわれたるならんとの噂なりとぞ。奇妙なこともあるものなり。食後すぐに行つてみると、お冬さんは真つ蒼な顔をして店に坐りいたり。声をかけても返事もせず、六兵衛老人の姿もみえず。さらに見まわせば、老人の道楽にてたくさんに飼いたるいろいろの小鳥の籠はひとつも見えず。お父さん^{とつ}はどうしたと重ねて問えば、お冬さんは微かな声で、奥に寝ていますという。鳥籠はどうしたときけば、鳥はみんな放してやりましたという。なにか子細がありそうなれど、この上の詮議もならねばそのままにして別れる。晴れて今日は俄かに暑くなる。——午後再び散歩。大谷川^{だいや}のほとりまで行つて引つ返して来ると、お冬さんの店にはかの磯貝という紳士が腰をかけて、何か笑いながら話し

ている。お冬さんの顔は鬼女のごとく、幽霊のごとく、たとえば方もなく物凄し。宿に帰れば宇都宮の田島さんより郵便来たり、今夜からあしたにかけて泊りがけで遊びに来いという。すぐに支度して行く。

田島さんというのは森君の友人で、宇都宮で新聞記者をしている人であった。森君も九日の午後の汽車で宇都宮に着いて、公園に近い田島さんの家に一泊したことは日記に詳しく書いてあるが、この物語には不必要であるからここに紹介しない。とにかく森君は翌十日も田島さんの家で暮らした。その晩帰るつもりであったところを、無理にひきとめられてもうひと晩泊った。森君が田島

さん夫婦に歓待されたことは日記を見てもよく判る。こうして彼は八月十一日を宇都宮で迎えた。彼の日記のおそろしい記事はこの日から始まるのである。

二

十一日、陰^{くもり}。ゆうべは蚊帳^{かや}のなかで碁を囲んで夜ふかしをした為^{ため}に、田島の奥さんに起されたのは午前十時、田島さんは予の寝ているうちに出社したという。きまりが悪いので早々に飛び起きて顔を洗い、あさ飯の御馳走になっているところへ、田島さんはあわただしく帰り来たり、これから日光へ出張しなければならな

い、丁度いいから一緒に行こうという。田島さんにせき立てられて、奥さんに挨拶もそこそこにして出る。停車場に駈けつけると、汽車はいま出るところなり。二人はころげるようにして漸く乗り込むと、夏の鳥とりうち打帽をかぶりたる三十前後の小作りの男がわれわれよりも先に乗っていて、田島さんを見て双方無言で挨拶する。やがて彼は田島さんにむかいて「あなたも御出張ですか。」といえ、田島さんはうなずいて「御同様に忙がしいことが出来ました。」という。それを口切りに、二人のあいだにはいろいろの会話が交換されたり。だんだん聞けば、予の留守のあいだに、日光の町にいたましき事件が突発して、かの磯貝満彦という青年紳士が何者にか惨殺されたるなり。

兇行は昨夜八時頃より今こんぎょう 曉あけ 四時頃までのあいだに仕遂げられたらしく、磯貝は銘めいせん 仙せん の単ひとえもの 衣え の上に紹ろ の羽織をかさねて含がんまん 満まん ケ淵ふち のほとりに倒れていたり。両手にて咽喉のど を強く絞められたらしく、ほかには何の負傷の痕もなし。また別に抵抗を試みたる形跡もなきは、その薄羽織の少しも破れざるを見ても察せられる。かれは片手にステッキを持っていたれど、それすらも振廻す暇がなかつたらしいという。それは新聞社に達したる通信にて、田島さんの話なり。また、鳥打帽の男の話によれば、磯貝の紙入れはふところから掴つか み出して、引裂いて大地へ投げ捨ててありしが、在中の百余円はそのままなり。金時計は石に叩きつけて打ぶちこ 毀わ してあり。それらの事実から考えると、どうしても普通の物

取りではなく、なにかの意趣いしゆらしいという。この烏打帽の男は宇都宮の折井という刑事巡査であることを後に知りたり。

午後日光に着けば、判検事の臨検はもう済みて、磯貝の死体はその旅館に運ばれていたり。田島さんと折井君に別れて、予は自分の宿にかえる。宿でもこの噂で大騒ぎなり。こんな騒ぎのあるせいか、今日もまただんだんに暑くなる。午後二時ごろに田島さんが来て、これから折井君と一緒に現場を検分に行くが、君も行って見ないかという。一種の好奇心にそそられて、すぐに表へ出ると、折井君は先に立つて行く。田島さんと予はあとについて行く。やがて下河原の橋を渡って含満ヶ淵に着く。たびたび散歩に来たところなれど、ここで昨夜おそろしい殺人の犯罪が行われ

たかと思うと、ふだんでも凄まじい水の音が今日はいよいよ凄まじく、踏んでいる土は震うように思われる。ここの名物の化地蔵ぼけが口を利いてくれたら、ゆうべの秘密もすぐに判ろうものを、石の地蔵尊は冷たく黙っておわします。予は暗い心持になって、おなじく黙って突っ立っていると、折井君は鷹のような眼をして頻りにそこらを眺めまわしている。田島さんもそれと競争するように、眼をはだけてきよきよしている。

やがて田島さんはバツトのあき箱を拾うと、折井君は受取って子細らしく嗅かいでみる。箱をあけて振ってみる。それからまた三十分ばかりもそこらをうろうろしているうちに、折井君は草のあいだから薄黒い小鳥の死骸を探し出したり。ようように巢立ちを

したばかりの雛にて、なんとという鳥か判らず。田島さんはほととぎす鳥すだろうという。折井君は黙つて首をかしげている。ともかくもその雛鳥の死骸とバツトの箱とを袂に入れて折井君はもう帰ろうと言ひ出したれば、二人も一緒に引返す。その途中、折井君は予にむかいて「あなたは先月からここに御逗留だそうですが、ここらの挽地物屋で、小鳥をたくさんに飼つている家はありませんか。」と訊く。それはお冬さんの家なり。予は正直に答えると、折井君はまた思案して「そのお冬というのはどんな女です。」と重ねて訊く。予は知っているだけのことを答えたり。

予はここで白状す。お冬さんがこの事件に関係があるうとは思われず。たとい関係があるとしても、おとなしいお冬さんが大の

男を絞め殺そう筈はなし、どのみち直接にはなんの関係もないらしく思われながら、予は妙に気おくれがして、お冬さんが家出のことをこの探偵の前にさらけ出すのを躊躇したり。別に子細はなし、若いお冬さんの秘密を他に洩らすのがなんだか痛々しいような気がしたためなり。他のことはみな正直に言いたれど、この事だけは暫く秘密を守れり。

折井君には途中で別れ、田島さんは予の宿に來たりて新聞の原稿を書く。きようは坐つていても汗が出る。陰りて蒸し暑く、当夏に入りて第一の暑気かも知れず。田島さんは忙がしそうに原稿を書き終りて、夕方の汽車で宇都宮へ帰る。予は停車場まで送つて行く。帰りぎわに田島さんは予にささやきて「折井君はお冬と

いう娘に眼をつけているらしい。君も注意して、なにか聞き出したことがあつたら直ぐに知らしてくれたまえ。」と言う。なんだか忌な心持にもなったけれど、ともかくも承知して別れる。宿へ帰る途中で再び折井君に逢う。折井君は汗をふきながら大活動の様子なり。しかもその活動を妨げるように、日が暮れると例の雷雨。

十二日、晴。神経が少し興奮しているせいか、けさは四時頃から眼がさめる。あさ飯の膳の出るのを待ちかねて、早々に食つてしまつて散歩に出る。六兵衛老人の姿はけさも店先にあらわれず。お冬さんに訊けば、気分が悪いので奥に寝ているという。お冬さ

んの顔色もひどく悪し。予は思い切つて「警察の人が何か調べに来ましたか。」と訊けば、誰も来ないという。少し安心して宿に帰れば、かの小せんという芸者が店口に腰をかけて帳場にいる女房と何か話している。まんざら知らない顔でもなければ、予も挨拶しながら並んで腰をおろすと、小せんはゆうべいろいろの取調べを受けた話をして、被害者の磯貝は財産家の息子で非常の放蕩者なり、自分は彼のひいき鼻尻ひいきになつていたれど、兇行の当夜はほかの座敷に出ている事も知らざりしという。予はそれとなく探さぐりを入れて、磯貝はお冬さんと何かわけでもあつたのかと訊けば、小せんは断じてそんなことはあるまいという。予はいよいよ安心して自分の座敷に戻る。

午後一時頃に田島さん再び来たる。被害者が資産家の息子だけに、この事件は東京の新聞にも詳しく掲載されてあるとの話なり。現に東京の新聞記者五、六名も田島さんと同じ汽車にて当地に入り込みたる由なれば、田島さんも競争して大いに活動するつもりらしく見ゆ。田島さんは宿で午飯を食いてすぐに出て行く。晴れたれども涼しい風がそよそよと吹く。——夕方に田島さん帰り来たりて、警察側の意見を予に話して聞かせる。兇行の嫌疑者に三種あり。第一は東京より磯貝のあとを追いかたりしものにて、彼の父は実業家とはいえ、金貸を本業として巨万の富を作りたる人物なれば、なにかの遺恨にて復讐の手をその子の上に加えしならんという説。第二は小せんの情夫にて、かれは鹿沼町の某会社の

職工なりといえ、一種の嫉妬か、あるいは小せんと共謀して欲得のために磯貝を害せしやも知れずという説。第三はかのお冬の父の六兵衛ならんという説。折井君は頻りに第三の説を主張していれど、これは根拠が最も薄弱なりと田島さんはいう。予も同感なり。

第二の説もいかがにや。欲心のために磯貝を害せしならば、紙入れや金時計をも奪い去るべき筈なるに、紙入れは引裂きたれど中味は無事なりしという。金時計も打毀して捨^{うちこわ}ててあり。これから考えると、これも根拠が薄いようなり。ただし小せんはなんにも知らぬことにて、単に情夫の嫉妬と認むればこの説も相当に有力なるべし。こう煎じつめると、第一の説が最も確実らしいけれ

ど、磯貝親子の人物についてなんにも知らざれば、予にはその当否の判断が付かず。ことに昨今は避暑客の出盛りにて、東京よりこの町に入り込みいる者おびただしければ、いちいち取調べるもなかなか困難なるべしと察せらる。

夕飯を食つてしまうと、田島さんはまた出て行く。二階の窓から見あげると、大きい山の影は黒くそびえて、空にはもう秋らしい銀あまのがわ河が夢のように薄白く流れている。やがて田島さんが忙がわしく帰つて来て、折井君はどうとう六兵衛老人を拘こういん引したという。予はなんだか腹立たしく感じられて、なにを証拠に拘引したかと鋭くきけば、田島さんも詳しいことは知らず。しかし現場にてきのう拾いたる巻煙草の空き箱に木屑の匂いが残っていた

のと、それを振ったときに細かい木屑が少しばかりこぼれ出したとの、この二つにて兇行者が挽地物細工に關係あるものと鑑定したらしいとのこと也。しかし挽地物屋はほかにもたくさんあり。もうひとつの証拠はかの薄黒い雛鳥の死骸なりといえど、これは折井君も秘していわざる由。

それを聞かされて、予はなんとなく落ちついていられず。田島さんが原稿を書いている間に、宿をぬけ出してお冬さんの家を覗きに行く。夜はもう八時過ぎなり。店先からそつとうかがえば、お冬さんの姿はみえず、声をかけても奥に返事はなし。すこし不安になりて、となりの人に訊けば、お冬さんはたった今どこへか出て行ったという。不安はいよいよ募^つりてしばらく考えているう

ちに、ふと胸に浮かびしことあり。もしやと思ひて、すぐに含満ケ渌の方へ追つて行く。

三

森君の日記にはこれから先のことを非常に詳しく書いてあるが、わたしはその通りをここに紹介するに堪^たえないから、その眼目だけを搔いつまんで書くことにする。森君はお冬を追つて行くと、果して含満ケ渌で彼女のすがたを見つけた。彼女はここから身でも投げらしく見えたので、森君はあわてて抱き止めた。お冬は泣いてなんにも言わないのを、無理になだめすかして訊いてみる

と、彼女の死のうとする子細はこうであつた。

前にもいう通り、六兵衛という老人は小鳥を飼うことが大好きで、商売の傍らに種々の小鳥を飼うのを楽しみにしていた。磯貝は去年もこの町へ避暑に来て、六兵衛の店へもたびたび遊びに来るうちに、ある日小鳥の飼い方の話が出ると、六兵衛は大自然で、自分が手掛ければどんな鳥でも育たないことはないと言つた。その高慢が少し面つらく憎く思われたのか、それとも別に思惑があつたのか、磯貝はきつと相違ないかと念を押すと、六兵衛はきつと受合ふと強情に答えた。それから五、六日経つと磯貝は一箇の薄黒い卵を持って来て、これを孵かえしてくれといった。見馴れない卵であるからその親鳥をきくと、それは慈悲心鳥であることが判つた。

日光山の慈悲心鳥——それを今さら詳しく説明する必要もあるまい。磯貝は途方もない物好きと、富豪の強い贅沢心とからで、その慈悲心鳥を一度飼つてみたいと思ひ立つて、中禅寺にいる者に頼んでいろいろに猫あやらせたが、霊鳥といわれているこの鳥は声をきかせるばかりで形を見せたことはないのです、彼は金にあかしてその巢を探させた。そうして、結局それは時ほととぎす鳥とおなじように、鶯うぐいすの巢で育つということを確かめて、高い値を払つてその卵を手に入れたが、それをどうして育ててよいか見当がつかないので、彼は六兵衛のところへ持つて来て頼んだのであつた。頼まれて六兵衛もさすがにおどろいた。ほかの鳥ならばなんでも引受けるが、慈悲心鳥の飼う方ばかりは彼にも判らなかつた。しかも

生れつきの強情と、強い自信力とがひとつになつて、彼はとうとうそれを受合つた。育つたらば東京へ報らしてくれ、受取りの使いをよこすからと約束して、磯貝は二百円の飼育料を六兵衛にあずけて歸つた。

名山の靈鳥を捕るといふのが怖ろしい、更にそれを人間の手に飼うといふのは勿体ないと、妻のお鉄と娘のお冬とがしきりに意見したが、六兵衛はどうしても肯きかなかつた。かれは深い興味をもつてその飼い方をいろいろに工夫した。そうして、どうやらこ
うやら無事に卵を孵かえしたが、雛は十日ばかりで斃たおれてしまったので、かれの失望よりも妻の恐怖の方が大きかつた。お鉄はその後一種の氣病きやみのように床について、ことしの三月にとうとう死ん

だ。磯貝から受取った二百円の金は、妻の長煩ながわづらいにみな遣つてしまつて、六兵衛の身には殆ど一文も付かなかつた。しかし慈悲心鳥の斃れたことを彼は東京へ報らせてやらなかつた。磯貝の方からも催促はなかつた。

そのうちに今年の夏がめぐつてきて、磯貝は再びこの町に來た。かれは六兵衛の不成功を責めた。あわせて今こんにち日までなんの通知もしなかつた彼の横着をなじつて、去年あずけて行つた二百円の金をかえせと迫つた。その申訳に困つて、六兵衛は更に新しい卵を見つけて來ると約束した。かれは三日ほど仕事を休んで、山の奥をそれからそれへと探しあるいたが、靈鳥の巢は見付からなかつた。よんどころなしに彼は鶯の巢から時鳥の卵を捕つて來て、

磯貝の手前を一時つくろつておいたが、その秘密を知っている娘はひどく心配した。さりとて二百円の金を返す目当てはとてもないので、どうなることかと案じているうちに、卵は孵つた。六兵衛は、その時鳥の雛を磯貝の旅館へ持つて行つてみせると、なんにも知らない彼は非常に喜んだ。六兵衛が帰つたあとで、磯貝はこれを宿の者に自慢らしく見せると、おなじ鶯の巢に育ちながらもそれは慈悲心鳥でないことが証明されたので、彼はまた怒つた。八月七日の午後に、磯貝はかの雛鳥の籠をさげて六兵衛の店へ押掛けて行つて、再びその横着を責めた。かれは詐欺取財として六兵衛を告訴するといきまいて帰つた。

お冬はもう堪^{たま}らなくなつた。このままにしておけば父が罪人に

ならなければならぬので、彼女はすぐに磯貝のあとを追って、泣いて父の罪を詫びると、磯貝は少し相談があるから一緒に来いといって、無理に彼女を中禅寺の宿屋へ連れて行った。そうして、父の罪を救うのも救わないのもお前の料簡次第であると迫られた。その晩は山も崩れそうな大雷雨であつた。お冬はそのあくる日も帰ることを許されなかつた。夜になつて磯貝が酔い倒れた隙をみて、彼女ははだしで宿屋をぬけ出して、暗い山路を半分夢中で駆け降りて帰つた。可愛い娘がこれほどにりようじよく凌辱されたことを知つて、六兵衛は燃えるような息をついて磯貝を呪つた。かれは仕事を投げ出してしまつて、傷ついた野獣のように奥のひと間に唸りながら横になつていた。たましいも肉も無残にしいた

げられたお冬は、幽霊のようになって空しく生きていた。

抑えられない憤怒ふんぬと悔恨とに身をもがいて、六兵衛は自分の店に飼つてある小鳥をみな放してしまった。しかしこの事件の種である時鳥の雛だけは、どういう料簡かそのままに捨てて置いた。九日の午後に磯貝が中禅寺から帰つて来て、もうこうなつた以上はいつそ自分の妾になれとお冬に再び迫つたが、彼女はどうしても承知しなかつた。それをきいて六兵衛のはらわたはいよいよ憤怒に焼けただれた。その翌晩の八時ごろに、磯貝が散歩に出て挽地物屋の前を通ると、六兵衛は籠のなかから時鳥の雛をつかみ出して、すぐに彼のあとを追つて行つた。そうして、二時間ほどの後に帰つて来た。磯貝が冷たい死骸となつて含満ヶ渚のほとりに

発見されたのは、そのあくる朝であつた。

「八日の晩にわたくしがいつそ中禪寺の湖水に飛び込んでしまえばよかつたんです。なんだかむやみに家が恋しくなつて、町まで歸つて来たのが悪かつたんです。」

お冬は泣いて悔くやんだ。彼女は自分の父が殺人の大きい罪を犯したのを悲しむと同時に、磯貝にしいたげられた自分のぬぐうべからざる汚おしよく辱を狭い町じゆうにさらすのを恐れた。彼女は父が今夜はいよいよ拘引されたのをみて、自分も決心した。磯貝の死に場所であつた怖ろしい含満ヶ渚を、彼女も自分の死に場所と決めたのであつた。

森君は無論お冬に同情した。身悶みもだえして泣き狂っている彼女を

慰めていたわって、再び挽地物屋の店へ連れて帰った。しかしお冬の家は親ひとり子ひとりで、その親は拘引されている。そのあき巢に娘ひとりを残して置いては、なんどきまた何事を仕出かすかも知れないという不安があるので、森君はお冬を自分の宿屋へ連れて帰って、主人にあらましの訳を話して、当分はここに置いてもらうことにした。

八月十二日の日記はこれで終わっている。田島はその翌あさ帰った。それから十九日まで一週間の日記は甚だ簡単で、しかもところどころ抹殺してあるので殆ど要領を得ない。しかしお冬がその日まで森君の宿屋に一緒に泊っていたことは事実である。森君はあまり綿密に日記をつけている暇がなかったらしい。八月二十日

以後の日記にはこういう記事が見えた。

二十日、晴。けさは俄かに秋風立つ。午後一時ごろに六兵衛老人は宇都宮から突然に帰つて来る。おどろいてきけば、殺人の嫌疑は晴れたる由。老人はその以外には口をつぐんでなんにも言わず。お冬さんは嬉し涙をこぼして自分の家へ帰る。予も一緒に行く。近所の人たちも見舞に来る。めでたきこと限りなし。——夜七時頃にお冬さんがたずねて来て、二時間ほど語りて帰る。夜はもう薄ら寒きほどなり。当分当地に滞在する由をしたためて、東京の兄や友人らに郵書を送る。兄からは叱言こいつが来るかも知れねど是非なし。

二十一、二十二の二日間の記事には別に目立った記事もない。ただ森君がお冬さんと親しく往来していた事実を伝えているのみである。二十三日には折井探偵が再びこの町に姿をあらわしたと書いてある。芸妓の小せんは再び拘引された。それは磯貝から預かっていた金をそのまま着服したことが露見した為である。二十四日は無事。

二十五日、陰。微雨。——宇都宮から田島さん来たる。磯貝殺しの犯人は、鹿沼町の某会社の職工にて、昨夜再び日光の町へ入り込みしところを折井刑事に捕縛されたりという。その職工は小

せんの情夫にはあらず、情夫の朋輩ほうばいにて小牧なにがしという者なり。田島さんの報告によれば、小牧は東京にて相当の生活を営いとなみいたりしが、磯貝の父のために財産を差押えられ、妻子にわかれて流転るてんの末に、鹿沼の町にて職工となりたる也。兇行の当夜は小せんの情夫と共に日光に來たり、ある料理店にて小せんと三人で遊んでゐるうちに、小せんは二階から往來をみおろして、あれは東京の磯貝という客だと教えしより、泥酔していた小牧は、むかしの恨みを思い出してむらむらと殺意を生じ、納涼すずみに行く振りをして表へ飛び出し、彼のあとをつけて含満ヶ渚まで行くと、磯貝は誰やらとしきりに言い争つてゐる様子なり。それがいよいよ彼の反感を挑発して、突然に飛びかかつて磯貝の咽喉を絞めつけ、

そこへ突き倒して逃げ帰りしなりという。

磯貝の言い争っていた男は即ち六兵衛老人なり。老人も磯貝のあとを追つ掛けて、無理無体に含満ヶ淵の寂しいところまで連れて行き、娘を凌辱したる罪を激しく責め、その償いに貴様の命をわたすか、但しはこの時鳥を慈悲心鳥として更に三千円の飼養料を払うかと、腕まくりの凄まじい権幕に談判し、磯貝がこれだけで勘弁してくれと百円ほど入れたる紙入れを突き出したるに、彼は怒つてずたずたに引裂いて捨て、磯貝が更に金時計を差し出したるに、これも石に叩きつけて打毀し、どうしても三千円を渡せと罵るところへ、かの小牧が突然に飛び込みて一言の問答にも及ばず、すぐに磯貝を絞め殺してしまいたり。これには六兵衛も呆気あっけ

にとられて少しぼんやりと突っ立っていたるが、自分の眼のまえに倒れている磯貝の死骸をみると、彼は俄かに言い知れぬ恐怖におそわれ、掴んでいたる雛鳥を投げ捨てて、これも早々に逃げ帰りしなり。これらの事情判明して六兵衛はゆるされ、小牧は捕わる。まことに不思議の出来事だと田島さんはいう。

真の犯人が逮捕されるまでは、この事件に関する新聞の記事を差止められていたが、あしたからは差止め解禁となつて何でも自由にかけると田島さんは大得意なり。記事差止めが解除となれば、あしたからは各新聞紙上にこの事件の真相が詳しく発表せらるるならん。犯人の小牧はもちろん、被害者の磯貝のことも、嫌疑者の六兵衛老人のことも……お冬さんのことも……。田島さんは今

夜一泊。

二十六日、雨。けさの新聞を待ちかねて手に取れば、宇都宮の新聞は一斉に筆をそろえて今度の事件を詳細に報道したり。八時頃お冬さんをたずねると、まだなんにも知らない様子なり。言つて聞かせるのもあまりに痛々しければ黙っている。田島さんはいろいろの材料をあつめて昼頃に引揚げて行く。雨はびしよびしよと降りしきりて昼でも薄ら寒い日なり。月末に近づきて各旅館の滞在客もおいおいに減つてゆく。いつもながら避暑地の初秋は侘しきもの也。午後四時ごろに再びお冬さんを訪ねんとて、二階の階子を降りて行くと、たった今お冬さんがこの手紙をほうり込ん

で行ったとて、女中が半紙を細かく畳んだのを渡してくれる。急いで明けてみると、——もうあなたにはお目にかかりません——。

森君の日記には、その後お冬さんについては何も書いていない。いや、書いたらしいが、みな抹殺してあるのでちつとも解らない。しかしお冬さんも六兵衛老人も決して無事ではなかったことは、九月二日の記事を見ても知られた。

九月二日。きょうは二百十日の由にて朝より暴れ模様なり。もう思い切つて宿を発つことにする。発つ前に〇〇寺に参詣して、親子の新しい墓を拜む。時どきに大粒の雨がふり出して、強い風

は卒塔婆そとばを吹き飛ばしそうにゆする。その風の絶え間にこおろぎの声きれぎれにきこゆ。——午前十時何分の上りの汽車に乗る——。

森君が今こんにち日まで独身である理由もこれで大抵想像された。森君を乗せた汽車は今ごろ宇都宮に着いたかも知れない。森君の胸には旧ふるい疵が痛み出したかも知れない。わたしは日記の上から陰った眼をそむけた。

今夜の雨はまだやまない。

青空文庫情報

底本：「蜘蛛の夢」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年4月20日初版1刷発行

初出：「慈悲心鳥」国文堂

1920（大正9）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「慈悲心鳥《じひしんちよう》」となっています。

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：花田泰治郎

2006年5月7日作成

2019年12月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

慈悲心鳥

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>